様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年　３月３１日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：２００７～２０１０
課題番号：１９３２００７０
研究課題名（和文）　談話のタイプと文法の関係に関する日英語対照言語学的研究

研究課題名（英文）　Japanese-English Contrastive Linguistic Research on the Relation between Discourse Types and Grammar

研究代表者
廣瀬　幸生（HIROSE YUKIO）
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授
研究者番号：００１８１２１４

研究代表者の専門分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：談話、文法、対照言語学、機能、形式

１．研究計画の概要

本研究は、談話がどのようなタイプでどのような内部構成をしているかという談話的要因と、文の産出・解釈にかかわる文法の間にどのような関係があるかを、日英語を比較対照しながら考察することを目的とする。その際、主に、次の４点に焦点をあてる。

①文法の少なくともある部分に影響を与えると考えられる談話のタイプにはどのようなものがあり、そのタイプはどのように特徴づけられるか。

②談話のタイプが変わることで影響を受ける文法の部分はどのようなものであり、どうしてその部分は談話からの影響を受けるのか。

③談話のタイプが変わっても影響を受けない文法の部分はどのようなものであり、どうしてその部分は談話からの影響を受けないのか。

④談話のタイプが変わることで影響を受ける文法の部分は、たとえば日本語と英語のように、言語が異なれば異なるのか。

２．研究の進捗状況

(1) 談話のタイプと文法の関係にアプローチする研究単位として、主に、次の４つを中心に研究を進めてきた。

①談話のタイプと主観的表現の文法に関する日英語対照研究（担当：廣瀬幸生）。

②談話のタイプと時制・アスペクトに関する日英語対照研究（担当：和田尚明）。

③談話のタイプと倒置文・否定・情報構造に関する日英語対照研究（担当：加賀信広）。

④談話のタイプと述語の照応・削除に関する日英語対照研究（担当：島田雅晴）。

これ以外にも、関連する現象の考察・検討なども随時行っている。上記研究単位のうち、①と②は認知意味論、機能論、語用論の視座を重視し、一方、③と④は生成統語論および形態統語論の視座を重視する。この役割分担によって、意味と形式のバランスのとれた研究を目指してきている。

(2) この３年間に、大学院生も参加する月例の研究会を 28 回開催し、研究分担者による研究ならびに大学院生の関連研究について、意見交換と討議を行った。研究分担者による学内での研究発表会を７件、学内外の専門家によるワークショップを１件、専門家を招いての講演会を 10 件開催した。刊行された論文は 16 件、学会発表は９件、著書などの図書は３件に及んでいる。

(3) これまでの研究で明らかになった点の主要なものは次のとおりである。

①談話と文法の関係に関する日英語対照研究にとって重要となる観点の一つは、言語使用者としての「話し手」を、伝達の主体としての「公的自己」と思考・意識の主体としての「私的自己」という二つの側面に解体し、日本語は私的自己中心の言語、英語は公的自己中心の言語と捉える見方である。

②公的自己が問題となる談話のタイプ（典型的には会話）と私的自己が問題となる談話のタイプ（心理描写、日記、独り言など）では、主観的表現の分布とその解釈に関わる文法が異なる。

③時制やアスペクトの解釈に関しても、公的自己・私的自己の違いが関与するとともに、当該談話において、状況内の「ウチの視点」をとるか、状況外の「ソトの視点」をとるかの違いが重要であり、日英語の文法はこの違

いに対応して解釈できる柔軟なシステムを備えていなければならない。

④従来、談話の影響を受けて語用論的に容認されると言われてきた諸構文（受動構文や二重目的語構文など）について、生成統語論および形態統語論の観点から見直しを行うと、談話の影響を受けているのは主に意味役割の読み換え部分であり、その部分を除けば、項構造に関する基本的文法は談話の影響を受けないと考えられる。

⑤私的自己中心の日本語と公的自己中心の英語では、談話のタイプが変わることで影響を受ける文法の部分は異なる。日本語では公的自己が関わる談話では、より有標的な言語形式の使用が加わり、英語では私的自己が関わる談話では、有標的な省略現象や言語形式の有標的な解釈が生じる。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

当初の計画に沿い、大学院生も参加する月例の研究会を定期的に開催していることから、大学院生の研究も本プロジェクトの方向に合うものが増えてきており、その中から博士論文に発展した研究も出てきている。また、学外の研究者との交流も、講演会やワークショップがきっかけとなり深まっている。その成果の一つが、和田が編者の一人となって編集した『「内」と「外」の言語学』の出版である。この論文集の中には、和田と廣瀬の論考のほか、本プロジェクトで講演をしてもらった６名の研究者の論考も収められている。また、廣瀬は海外の研究協力者である長谷川葉子氏（UC バークレー）とともに、日英語における主体性の現象に焦点をあて、『日本語から見た日本人―主体性の言語学―』を共著で出版した。生成統語論の観点から研究している加賀は、主題役割と構文に関する研究として *Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax* を出版した。この研究は、2008 年度の市河賞を受賞する評価を得た。

４．今後の研究の推進方策

平成 21 年度までの研究内容をさらに発展させ、その成果を発表していく予定である。最後の年となる平成 22 年度は、特に次の２点に重きを置く。

①平成 22 年 9 月に、海外の研究協力者である Bert Cappelle 氏（ベルギー・ヘント大学）と長谷川葉子氏（上掲）を招いて、談話と文法の関係に関する国際ワークショップを開催する。

②和田が Cappelle 氏とともに英文の論文集 *Distinctions in English Grammar* を編集し、第一線で活躍する海外の研究者の論考とともに、本研究プロジェクトの成果の一部を出版する。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）

① 廣瀬幸生「話者指示性と視点と対比―日英語再帰代名詞の意味拡張の仕組み―」『「内」と「外」の言語学』147-173 頁、2009。査読有り

② Wada, Naoaki, “The Present Progressive vs. *Be Going to*: Is Doc Brown Going Back to the Future Because He is Going to Reconstruct It?” *English Linguistics*, 26, 96-131, 2009.査読有り

③ Shimada, Masaharu, “WH-Movement and Linguistic Theory,” *English Linguistics*, 25, 519-540, 2008.査読有り

④ Kaga, Nobuhiro, “Syntactic Categories and the Autonomy Thesis,” *English Linguistics* 24, 137-161, 2007.査読有り

〔学会発表〕（計９件）

① Nagano, Akiko and Shimada, Masaharu, “English [V-A]v Forms and the Interaction between Morphology and Syntax,” The Seventh Mediterranean Morphology Meeting, 2009.9.12, University of Cyprus

② 和田尚明“A Contrastive Study of Differences in Choosing and Interpreting Japanese and English Tense Forms,” 山口大学英語学研究会、2009.1.21、山口大学

③ 廣瀬幸生「話し手の解体と主体化・客体化―日英語対照研究の観点から―」日本語文法学会第９回大会、2008.10.18、甲南大学

④ 加賀信広「文法の考え方―語法研究の事例を通して―」筑波英語教育学会、2008.6.21、筑波大学

〔図書〕（計３件）

① 廣瀬幸生、長谷川葉子『日本語から見た日本人―主体性の言語学―』開拓社、2010、224 頁

② 坪本篤朗、早瀬尚子、和田尚明（編）『「内」と「外」の言語学』開拓社、2009、430 頁

③ Kaga, Nobuhiro, *Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax*, Kaitakusha, 2007, 294pp.